

もりぼじんじゃ でんせつ 守母神社の伝説

わかすぎやま にし たけじょうやま こだか やま むかし すぎし しろ
若杉山の西に 岳城山 という小高い山がありますが、ここに 昔、杉氏の城である

たかとりいじょう せんごくじだい じょうしゅ すぎし にさい わかぎみ
高鳥居城 がありました。戦国時代のこと、城主の杉氏には二才になるかわいい若君が

いました。やがては 城主 となるこの子をりりしい若者に育てほしいというのが杉氏や

かしん ねが わかぎみ よういくがかり じんぶつ さが みやこ
家臣の願いでした。そこで、若君の 養育係 をまかせられる人物を捜していたところ、都

から来たとき 噂 され近隣の村人の尊敬も厚い女性が佐谷にいるということを聞き、さっ

そく 乳母に迎えることになりました。それから 半年程 たった 天正 十四年七月、この城に

せんか なみ お よ さつま しんこう しまづぐん まえ らくじょう とき むか
も戦禍の波が押し寄せ、薩摩から 進攻 してきた島津軍の前に 落城 の時を迎えていまし

た。その時、杉氏は「せめて子供だけは生きながえさせよう。」と、乳母に子供を託して植木

どうりんじ お しまづぐん ついとう きび こども だ
の道林寺へ落ちのびさせようとなりました。しかし、島津軍の追討は厳しく、子供を抱いた

うば あし はや うご やま つ
乳母の足でそう速くは動きません。ふたりがどうか山のふもとにたどり着いたときには

うしろ うつて こえ せま うば おお いわ
すぐ 後 に討手の声が迫っていました。乳母がふとまわりをみると、そこに大きな岩があ

いわかげ いき にさい わかぎみ つか くらやみ おそ
ったのでその岩陰に息をひそめてかくれましたが、二才の若君は疲れと暗闇への恐れか

な ごえ な ごえ いわかげ ひそ み
らか泣き声をあげてしまいました。そして、その泣き声で岩陰に潜んでいたのが見つか

ただ とら しよけい とき き つ うば くる いき
り、直ちに捕えられ処刑されてしまいました。その時、切り付けられた乳母は苦しい息の

した ひつう こえ わたし ころ よ こ うば
下から悲痛な声をふりしぼり「私 が殺されても、この世にいるすべての子の乳母となり、

な こたち まも つづ い のこ いき ひ のち ふたり し いた
泣く子供達を守り続ける。」と言い残して息を引きとったそうです。その後、二人の死を悼

むらびと ちい た まつ もりぼじんじゃ いらい じんじゃ ちいき
んで村人が小さなほこらを建てて祭りました。それが守母神社です。以来この神社は地域

ひとびと もりぼ よ こども よなき なや ははおや しんこう
の人々から「守母さま」と呼ばれ、子供の夜泣きに悩む母親の信仰をあつめるようにな

りました。いまでもほこらの 傍らにそなえられている 人形を借りていき、子供の夜泣き

あたらし にんぎょう そ れい く ひと すがた た
がなおると新しい人形を添えてお礼に来る人の姿が絶えません。

だんじょう 弾正さま

たかとりいじょう じょうしゅ すぎだんじょう かお おお ふだん き
高鳥居城の城主であった杉弾正の顔には大きなイボがあつて普段からそれを気に

てんしょう ねん つき さつま しまづぐん ちくしぐん いわやじょう せ お よせい
していました。天正14年7月、薩摩の島津軍が筑紫郡の岩屋城を攻め落とし、その余勢

たかとりいじょう お よ すぎけ ふんせん らくじょう とき
をかって高鳥居城にも押し寄せました。杉家の奮戦もむなしく、いよいよ落城の 때가

すぎだんじょう お さいき しろ だっしゅつ
せまってくると、杉弾正は落ちのびて再起をはかるべく城を脱出することにしました。

しゅび しろ だっしゅつ たけじょうやま どうりんじ ちか たど つ
首尾よく城から脱出し、岳城山のふもとにある道林寺の近くまで辿り着きましたが、

しまづぐん ほういもう よそういじょう あつ みまわ しまづぐん はたさしもの いた ところ み
島津軍の包圍網は予想以上に厚く、あたりを見回すと島津軍の旗指物が至る所に見え、

いじょううご かしん ひとり のうみん へんそう に
それ以上動くことができなくなりました。家臣の一人が農民に変装して逃げよ

ていあん しまづぐん うつて こえ すぎだんじょう ぜったい う と かお おお
うと提案しましたが、島津軍の討手の声で「杉弾正を絶対に討ち取れ。顔には大きな

みのが い き すぎだんじょう じぶん かお
イボがあるので見逃すな。」と言っているのが聞こえました。杉弾正は自分の顔のイボ

しまづぐん し わた さと いじょう とうぼう だんねん いっしょ かしん じん
は島津軍にも知れ渡っていることを悟り、それ以上の逃亡を断念し一緒にいた家臣四人

とも じがい いらい なや ひと どうりんじけいだい だんじょう すぎだんじょう
と共に自害しました。それ以来、イボに悩む人は、道林寺境内にある弾正さま(杉弾正

はか いの かなら お い つた まい ひと
の墓)にお祈りするとイボが必ず落ちると言い伝えられています。なお、お参りする人は

あめだま じぶん とし かず はか そな
飴玉を自分の年の数だけお墓に供えたといひます。

わかすぎやま ちめい 若杉山の地名

じんぐうこうごう かいろさんかん せ い とちゅう せんしょうきがん かしいぐう さんばい さい みごと
神功皇后が海路三韓に攻め入る途中、戦勝祈願のため香椎宮に参拝した際、見事な

あやすぎ がん いっぽん えだ よろい そで さ しゅっせい
綾杉があったので、願をかけるために一本の枝を鎧の袖に挿して出征したところ、

ぶじ がいせん よろい そで さ あやすぎ しゅっぱつ きこく
無事に凱旋することができました。しかも、鎧の袖に挿した綾杉は出発してから帰国

か じんぐうこうごう すぎ れいけん がいてき く
するまで枯れていませんでした。神功皇后はこの杉には靈験があり、外敵からこの国を

まも まも かんが げんかいなだ のぞ こだか やま のぼ あやすぎ えだ さんちょう う
守るお守りになると考え、玄海灘を望む小高い山に登り綾杉の枝を山頂に植えました

のち う すぎ えだ みごと そだ すぎ よ
た。その後、植えられた杉の枝が見事に育ったのでこの杉を分杉（わけすぎ）と呼ぶよ

のち ちよ あやすぎ えだ
うになり、後になまって若杉（わかすぎ）と呼ぶようになりました。そうして綾杉の枝が

こだか やま わかすぎやま なづ い
あるこの小高い山は『若杉山』と名付けられたと言われています。

たびいし ちめい 旅石の地名

じんぐうこうごう かいろさんかん せ い ひまもり かすやまち あえ うみまち む とちゅう
神功皇后が海路三韓に攻め入るため日守（粕屋町阿恵）から宇美町へ向かう途中にこの

ち しょうきゅうし と さい にんしんちゅう こうごう ながたび つか いし
地で小休止を取った際、妊娠中であった皇后は長旅の疲れからか、そばにあった石の

うえ すわ たいへんつか おも も き
上に座って「あなわびしや（大変疲れた）」と思わず洩らしてしまいました。それを聞い

ちか じゅうみんたち ばしよ よ ご ゆえ
た近くの住民達はこの場所を「わびし」と呼ぶようになりました。その後、故あって『多

げんざい よ
米寺（ためじ）』となり、現在では『旅石（たびいし）』と呼ばれるようになりました。ち

なみに^{じもと}地元ではタビシと^{はつおん}発音します。また、^{じんぐうこうごう}神功皇后が^{こしか}腰掛けた^{いし}石を^{ごしんたい}御神体として^{じんじゃ}神社

が^{もう}設けられたそうです。この^{ばしょ}場所には^{やしろ}社を^た建て^{はちまんだいじん}八幡大神を^{まつ}奉りました。(現在の^{げんざい}

^{たびいしはちまんぐう}旅石八幡宮です。)

この^{はなし}話は『^{ちくぜんのかくにぞくふどき}筑前國續風土記』によると^{いか}以下のように^{しる}記されています。

「古説に云傳ふるは、神功皇后日守にて、日の早晚をうかゝはせ玉ひ、其後此所に来り玉ふ。然るに、御産の催にて、御こゝち例ならず、おはしましける故、あなわひしやとの玉ひぬ。後人因て其所をわひしと名付たり。其後訛て旅石といふ。後世に至りて、皇后のとをり玉ひし所なればとて、御社を建て、八幡大神を祭る。西に賓満大神、東に太祖權現も同殿にまします。又民俗に云傳ふるは、此中殿の神體は、則 神功皇后の御腰を懸いこはせ玉へる石也。此時 應神帝胎内にましませは、御母子一體の儀にて、二神を八幡宮と崇祭れる神也と云。十月九日祭あり。近世故有て、多米寺と書しか、今改めて旅石の字を用ゆ。」

^{ちもちじぞう}乳持地蔵

^{むかし}昔、^{さたに}佐谷に^{あかごいけ}赤子池(^{まず}貧しい ^{じゅうみん}住民が ^く食い ^{ぶち}扶持を ^へ減らすために ^{うま}生れたばかりの ^{あかご}赤子を ^お置き

^ざ去りにした池) ^{いけ}がありました。 ^{まず}貧しさゆえに ^{あかご}赤子を ^す捨てざるを得ない ^え住民達 ^{じゅうみんたち}は ^{ふびん}不憫な

^{あかごたち}赤子達 ^しち死んで ^しまでが ^{おも}さみしい ^{おも}思いを ^{じぞうぞう}しないように ^{いけ}地蔵像を ^{あんち}池のほとりに ^{あんち}安置しまし

^ごた。その後、 ^{なぜ}何故か ^すここに ^{あかご}捨てられた ^{いたい}赤子の ^み遺体が見 ^みつからなくなりました。そ

^{じゅうみんたち}こで ^す住民達は ^{あかご}捨てられた ^{じぞう}赤子地蔵が ^{そだ}育ててくれたと ^{うわさ}噂 ^{げんざい}しました。それから ^{げんざい}現在まで

この ^{じぞう}地蔵に ^{まい}参ると ^{ぼにゅう}母乳の出が ^よ良くなるという ^い言い ^{つた}伝えが ^よでき、この ^{じぞう}地蔵を ^{ちもちじぞう}乳持地蔵と ^よ呼ぶ

ようになりました。

^{とびおじぞう}飛尾地蔵

てんしょうねんかん しまづぜい たかとりいじょう せ かんおんだに せんか ころ
天正年間 に島津勢が高鳥居城を攻めるにともない、観音谷が戦禍にあっていた頃、

と き じぞう おとこ はたけしごと とちゅう
いずこより飛び来た地蔵といわれています。むかし、ある男が畑仕事に行く途中、ふと

おがわ み むら こどもたち じぞう みず あそ み おとこ かわ
小川を見ると村の子供達が地蔵に水をかけて遊んでいるのを見かけました。男は「川で

じぞうさま あそ もの もど こどもたち しか
地蔵様を遊び物にするとはバチがあたるぞ。もとのところへ戻してこい。」と子供達を叱つ

お はら おとこ はたけ ほか はたけ
て追い払ってしまいました。そうこうしたあと、男が畑についてみると他の畑はなん

おとこ はたけ さくもつ か おとこ し
ともないのに男の畑の作物だけが枯れていました。びっくりした男がそれを知らせに

いえ もど おとこ おく とつげんいし かた みうご
家に戻ったところ、男の奥さんが突然石のように硬くなって身動きができなくなって

おとこ むら ざとう たず
いました。いよいよもってあわてた男が村にすむ座頭さんに尋ねてみると、「せっかくお

じぞうさま こどもたち あそ じゃま い
地蔵様が子供達と遊んでいたのに邪魔をしたからバチがあたったのだ。」と言われました。

おとこ こどもたち あやま はたけ さくもつ おく もと もど つた
そこで男は子供達に謝りにいったところ、畑の作物も奥さんも元に戻ったと伝えら
れています。

しょうちゅうにねんめいいたび 正中二年銘板碑

きたに けんしょうじ ふくおかけん ばんめ ふる いたび しょうわ
佐谷の建正寺に福岡県で四番目に古い板碑があります。これは正和3年(1314年)

おおだんなとうざえもんいゆうどうしげとし ひと げんせ せいこう かんしゃ じぶん かせ
に大檀那藤左衛門入道茂利という人が現世での成功に感謝するとともに自分の重ねてき

つみ しょくざい かこ ふたおや な りょうしん じょうぶつ ねが
た罪の贖罪をするため、そして過去二親(亡くなった両親)の成仏を願うために百

そう ほけきょう どくじゅ いぎょうたつせい きねん こんりゅう きねんひ
数十人の僧に法華經一万部を読誦させました。この偉業達成の記念に建立した記念碑で

ひぶん しょうわ ほけきょう はこぎくう よ はじ しょうちゅう
す。碑文には「正和三年七月(一三一四年)に法華經一万部を管崎宮にて読み始め 正中

2年(1325年)左谷山 賢聖院 にて結願した。」と書いてあります。ちなみに法華經を

一部読誦するのに現代の僧侶が早く唱えて九時間かかるそうです。碑文によると11年

かかって一万部を読誦したとあるので大変な行だったということがわかります。(11年は約96,000時間)

板碑の 詳細 は以下のとおりです。

材質は花崗岩で、高さ130cm、巾120cm、厚さ15cm(上部)、30cm(下部)のほ

ぼ正方形の板状。正面は三段に刻線で区別され、上段の円相内に梵字三字を薬研彫

りで刻み、向かって左からキリーク(阿弥陀如来)・バク(釈迦如来)・バン(大日如来)

の三種子があります。中段は左右に四師の尊号『聖徳・伝教・弘法・聖空』をな

らべ、中央に妙法蓮華教とあり法華經方便品の偈、諸行無常偈を書き、13行に

配置されています。下段は21行にわたり建碑の由緒が書かれ、内容は「正和三年七月

(1314年)に法華經一万部を 菅崎宮にて読み始め 正中二年(1325年)左谷山

賢聖院にて結願した。」と書いてあります。

佐谷の地名

長期にわたる 仏教留学 より帰国した弘法大師は、その成果を発揮するため秘法をお

さめに若杉山に登りました。無事に秘法をおさめた弘法大師がいよいよ下山するとき、ふ

もとを見ると左右に谷がありました。これを見た弘法大師は『ここからみると、左側に

左谷（さたに）、^{みぎがわ}右側に右谷（うたに）がありますね。』とお供におっしゃられたそうです。

それ以後これを聞いた ^{いご}住民達 ^{じゅうみんたち}はそれぞれの谷^{たに}のことを左谷^{さたに}と右谷^{うたに}といい、左谷^{さたに}をいつの

まにか^{さたに}佐谷^かと書くようになりました。